長谷川四郎全集　第十六巻

長谷川四郎全集第十六巻

一九七八年九月五日発行

著者長谷川四郎
発行者中村勝哉
発行所株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・一八四一（編集）
振替東京六-六二七九九
中央精版印刷・美行製本
ブックデザイン平野甲賀
©一九七八年〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集 第十六巻

晶文社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1 長い長い板塀
野ざらし抄 9
デルスー時代 24
川は流れる 60
千字文 79
長い長い板塀 99
時計 116

2
コインさんの話 135
アラフラの女王 156
よく似た人 179

3
守るも攻めるも—墨子

4 北京ベルリン物語 231

作者のノート・16 335

解題 福島紀幸 341

長谷川四郎書誌

年譜 361

著作年表 388

著書目録 421

訳書目録 440

共著・編集書一覧 448

対談・座談会一覧 450

1

長い長い板塀

野ざらし抄

おく露や小町が骨の見事さよ　　鈞雪

法政大学ドイツ文学科出身。卒業論文はゲーテの西東詩篇。と履歴書に書いて持ち歩きドイツ語が出来るとふれまわって、「主任教授は？」ときかれたら、「関口存男先生」と、そくざに答えることにしていた。関口存男先生といえば名にしおうドイツ文学の天才的泰斗であって、その講座のすみの方に出席したことも三、四回あったので、ねっからの大風呂敷をひろげたわけでもなくて、とにかくこれにひっかかる人がいて、翻訳の仕事にありついた。いつも遠くにばかり気をとられている者には、あんがい近いところに、この、ひっかかる人はいるものとみえて、というのは仲間と共同で借りて自炊していた東中野の、六畳間と三畳間からなる、ピッチ塗りの文化住宅の、つい目と鼻のさきの二階建ての大きな家に住む退役陸軍少将が女中の使者をよこして、ちょっとおいで乞うと言ってきたので、行ってみると、そこのものものしい応接間にとおされて、一冊のドイツ語の原書をみせられ、「わかるか」ときかれたので、「わかります」と答えた。退役陸軍少将の家の奥の一室では、退役陸軍少将の娘がさかんにピアノをひいていて、退役陸軍少将は、もう一つべつの試験をするように、いま聞えている曲は、「あれはなにか」ときいたので、そくざに「シューマンのピアノ・コンチェルト」と答えた。退役陸軍少将は、それがあたっているかどうかをたしかめるためだったろう、奥へひっこんでいき、ピアノはぴたり鳴りやんで、またぞろ鳴りだすと、退役陸軍少将もまた応接間に入ってきて、さっきのドイツ語の原書をこっちへ渡してよこし、いささか命令口調で、「これを翻訳しなさい」と言った。下訳である。こちらはすぐさまひきうけたが、それというのも、ことほどさようにくうにこまっていたからだ。偕行社という判コのべたり押された本だった。偕行社というのは、わが国旧陸軍の現役将校及び相当官を社員として、社員相互の扶助や親睦などの事業を行なった団体。明治十年創立。敗戦により解散（広辞苑）である。偕行とは「詩経」に出てきて、つれだって行くという意味なそうな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今にして思わなくても、下訳の稿料は安いものだったが、それでけっこう生活が出来た。たぶん、「シューマンのピアノ・コンチェルト」も、この下訳入手に側面的援助をしてくれたのにちがいない。口から出まかせが、あんがいあたっていることもたまにはあるものだ。一方、共同自炊生活の仲間は、大久保のあたりに建築中の海軍省関係のばかでかい建物の基礎工事にドンブリかけて穴掘りのモッコかつぎに従事していた。

下訳の仕事はこれをきっかけとしてけっこうあった。陸軍関係のつぎには鉄道関係、つづいて医学関係といったあんばいで、やがて自炊仲間からわかれて一戸をかまえ、それが九尺二間の長屋で、近くの同じ造りの長屋に平井功という高踏派の詩人が住んでいたことをおぼえている。朝から晩まであれこれと字引きと首っぴきで、ついにつくづくいやになってしまったので、こんどは風呂敷を思いきって大きくひろげ、「外国語ならなんでもこなす。」ということにして、なんとか満鉄調査部にもぐりこむべく、いろいろやってみることにした。

ドイツ語から下訳した本がその後、出版されたかどうかについてはぜんぜん知らず、知ろうともしなかったし、およそ、いかなる反応も聞いたこともなかった。訳すことは訳したが、さて、ドイツ語をしゃべるとなると、からきしだめだった。およそドイツ人と話をすることなど、ぜんぜんなかった。そこへいくと、当時、ぐんと年の若い、本間君という友人がいて、ノヴァーリスの研究家で、横浜の人で、といって両親は対岸の千葉の漁師だといっていたが、ドイツ語がべらべらだった。横浜在住のドイツ人とはたいてい知り合いで、共に外人墓地など散歩し、ノヴァーリスなど談じていたのだろう。一もくも二もくも三もくもおかざるをえない、年少にしてキリン児のごとき、学友ではあった。しかしながら

キリン児が大キリンとなり老キリン

なのである。というのは、就職運動が功を奏して満鉄調査部に就職して、船で大連へ渡り、それっきり、キリン児の本間君とわかれること十数年。一九五〇年の昭和二十五年、興安丸で日本海をわたって復員し、さらにその数年後、本間君と再びあいまみえた時は、本間君はひどくふけた感じで、二人ともども、もうつるべおとしの秋だった。

「その後、どうしてた?」

昭和二十八年当時、私は茅ヶ崎の東海岸の、とある家の離れに間借り生活をして、『シベリヤ物語』などを書いたりしていて、〈文名〉が大いに高まっていた。あれよあれよだった。それで私がまだ生きていることを新聞かなにかで知った本間君は私を指名手配して居所をつきとめ、わざわざ茅ヶ崎に訪ねてきてくれたのである。本間君はもう「禿げあがりかかりつつある頭かな」だった。再会ではあったが、あんまり久しぶりだったので、思い出す

のに、しばらくの時間がかかった。本間君の着ている服はホームスパンの背広で、もともとはそうとう高価なものらしかったが、それがすっかりくたびれて、糸目もあらわに、よれよれになっていた。でも靴だけはピカピカにみがきあげられていた。「やってるじゃないですか、あんた。」と本間君はあいさつがわりにこう言った。

そこで、とっさになんといっていいかわからなかったので、「その後、どうしてた?」ときいてみるほかはなかったのである。

学生時代の本間君は苦学生で、一九四三年には上智大学に籍をおいていた。本間君は「出発は遂に訪れず」の島尾敏雄よりさらに五年ほど若い。上智大学に籍はおいていたものの、ほとんど登校はせず、今でいうところのアルバイトに憂身をやつしていたが、このアルバイトというのがモッコかつぎでもなく、さりとてドイツ書の下訳などでもなくて、各種大学生の卒業論文の代作だった。こういうことのうまい男だったのである。獣医学だろうが薬学だろうが哲学だろうが法学だろうが、はては、〈あらずもがな〉の神学だろうが、彼らの卒業論文を、それが卒業論文であるかぎり、本間君はこなして、そうとうかせいでいた。そしてときたま学校へ出ると、生れつき手の器用な人が、だんだん練習してトランプ手品の大家のまねごとをするように、ドイツ人の教授あいてにドイツ語で、よそから聞いたかぎりでは流暢に、また、どんな内容かはいざ知らず、ファウストやメフィストについて論じあうといったタレントぶりを発揮したので、末はハイデルベルク大学の哲学教授か大詩人か、とほんきで考えていた人もあったそうだが、学校は卒業はしないで、学徒動員で海軍に入れられた。

「おしいことをしたな。」と私が言ったら、「いや、とんでもない、けっこうおもしろかったですよ、あんた。」と本間君は答えた。

学徒動員で海軍に入り、見習士官となり、グアム島へもっていかれたが、そこで同期生たちが少尉に任官するだいぶ前に、はやくも将校待遇で、グアムからシャンハイへ、それからシンガポールへとつれていかれた。

「そんなことあったのかね?」半信半疑。

「それがあったんですよ、あんた。」と本間君は言った。

ナチ・ドイツに太平洋艦隊というのがあったかどうか知らないが、とにかくナチの軍艦が太平洋水域にまで進出していて、ナチは日本の友邦だったので、日本の軍艦との友好的な交際が必要で、その結果、ドイツ語の通訳がぜひとも必要ということになり、キュビドンならぬ、白羽の矢が本間君にたてられて、一夜にして本間君は将校待遇の通訳官にされちまった。

「フーム、なるほどね。」と私は感心して言った。

「そうなんですよ、あんた。」と本間君は言った。

学生時代の本間君は私と話をする時、「あんた」と間投詞のようにくっつける妙なクセがあって、それがいつまでもつきまとった。

ドイツの軍艦付き日本語通訳という将校待遇は、たいへんのん

きなものだった、と本間君は言った。つまり、なんの責任もなくて、右から左へ左から右へ、伝声管に向って、言葉を交換してやれば、それでよかったので、交換手みたいなものだった。
「専門語などあって、こまったろ？」
「ぼくもそれが心配だったけど、たいしたことなかったですよ、あんた。」
つまるところ、重要な通信などは、みんな暗号でやっていたのだろう、通訳官・本間君をわずらわして行なわれるのは儀礼的な交歓くらいのものだった。日本の海軍付ではなくて、ドイツの軍艦付で、艦長その他の士官と同じテーブルでめしをくい、士官用の一室を与えられ、のんびりとした生活だった。ほかの士官との〈共有〉ではあったが、従卒みたいなのもついていたということで。
「へえ、たいしたもんだね。」
「いやー、あれにはまいりましたよ、あんた。」と本間君は言った。
もともと、人を使う習慣がなくて、生来、そういうことの不得手な本間君は、従卒を〈使役〉しないで、なんでもかんでも自分でやったので、かえって従卒から叱られて、「靴をみがけ」なら「靴をみがけ」と命令しろ、と命令された、と本間君は言った。それはとにかく、そのほかはけっこうおもしろくてためになる生活で、ドイツ人の若い士官たちと、文学談やら映画談やら女性論、恋愛論などをやり、図書室で本（古典はそろっていた）を読み、ショウギとチェスの交換教授などで、日々を送り、よく陸上における交歓パーティにも出席して、彼我の艦長の挨拶を同時通訳し、あとはごちそうをくっていればよかった。
「それで、終戦かね。」
「そうなんです、あんた。」
ナチのほうが日本よりさきにへばってしまったが、それでもナチの軍艦は極東の水域をあちこちして、あわよくば日本の軍艦と共同作戦で一旗あげようとしているかのごとくだったが、いよいよ日本もお手あげとなったときは、ナチのその軍艦はホンコン沖に停泊していて、ひそかに食糧・水・燃料をマンタンにして、南アメリカへ「蒙塵」しようとしていた。いや、蒙塵ではなく蒙浪だ。
「どうしていっしょにいかなかったの？」
「それがこっちの思うとおりにいかなかったんですよ、あんた。」
いよいよホンコン沖から南アメリカへ向って出発しようとしていた時、九竜島の方から一そうのランチがフルスピードで疾走してきて、それにはドイツのスパイとおぼしき金髪のマタ・ハリ的美人が一人のっていて、この美人が縄梯子をつたって軍艦に乗りうつるやいなや、有無をいわせず、いれかわりに本間君がそのランチにおろされ、のせられて、ホンコンへ送りかえされてしまった、と本間君は言った。
「金は一銭もくれずか。」という私の声はきびしかった。
「うん。くれたって、ナチの金だもの、百万マルクも紙くずです

よ、あんた。」

といったようなわけで、このような終戦もあったことがわかった。ホンコンではホンコン大学の先生でドーナットというドイツ人の世話で、シャンハイ経由ではなく、いきなりアメリカ船で神戸まで着のみ着のまま送られてきたんだ、ということだった。

「で、いまなにしてるの？」

「そう、なにしてると思います、あんた？」

「わかりませんね。」

「そうかなあ、わかるでしょ、あいかわらずなんですよ、あんた。」

あいかわらず、というのは、あいかわらず、ドイツ語をメシのタネにしているということだった。というのは、今でもあるかもしれないが、当時のわが国には、外務官僚の古手中の古手を顧問とする通訳協会とかいうのがあって、それに登録しておくと、それぞれの専門に応じて必要が生ずると、〈お座敷がかかる〉ことになっており、本間君はドイツ語で登録しておいたので、時たまドイツ人旅行者がくると、お座敷がかかったのである。

「いまお相手のドイツ人はどんな人だい、男？　女？」

「女流詩人インゲボルク・バッハマン、あんた。」と本間君が言ったのは、もちろん、じょうだんで、つまり、失職中ということだった。

「ノヴァーリスはどした？」

「ときたま読んでますよ、ノヴァーリスはわるくないですものね、あんた。」

それから、気まぐれに思いついたように、

「ぼくも、そのうち、小説かいてみたいと思ってますが、見てくれます、あんた。」

「いや、見るなんて、そんな、読ましてもらいますよ。」

ここでビールを三本、二人で乾杯し、本間君は帰っていき、私は雑文かきにもどり、互いにそれっきり、なんの音沙汰もなくなった。

三年後の一九五六年（昭和三十一年）、私は茅ヶ崎から東京世田谷の豪徳寺に引越した。土木技師でダム建設の現場へ一家をあげて三年ばかり移り住んだ人の家の留守番と借家人を兼ねた住人としてだった。茅ヶ崎在住時代に、わが侘住いに住みついてしまった猫を五匹つれて引越した。猫というものは「人につかず家につく」と言われるが、その五匹の猫どもは、けっこう人について、いっしょに引越してきて、はじめのうちはそわそわして、姿をかくしてしまったが、やがてまたあらわれて、そこに住みついた。これはもう旧時代の猫ではなく新時代の猫だったからだろう。それとも、すぐそばにある豪徳寺というお寺さんは「まねき猫」発祥の地で、そこの名物でもあるので、しぜんとそれに「まねかれて」だったかもしれないが、ほんとのことはわからない。わかるのは五匹が七匹、七匹が十三匹となり、ついにこっちは自衛上、「猫みな殺し作戦」に、出ざるをえなくなったことだけだ。

この豪徳寺には豪徳寺という停車場があって、そこのプラット

フォームで新宿行の電車を待っていると、どうも見覚えのある男がいるので、近よって横あいから見やると、それが果してといおうか、本間君だった。新調の狩猟服みたいなコールテンの服をきて、ハンティングをかぶっていて、羽振りはわるくなさそうだった。

「いそがしそうだな。」と私は言った。

「いそがしいといえばいそがしいし、いそがしくないといえばいそがしくないですね。あんた。」と本間君は依然として本間君だった。

電車が来たとき、私たちはそれに乗らなかった。私がさきに立ってだったか本間君がさきに立ってだったか、とにかく二人はひきかえして、せっかく買ったキップをむだにして、停車場の圏外へ出て、勝手知ったる者のごとくすたすた歩き、最初に出会った飲み屋へ入っていった。

その店でビールをいっぱい飲むと本間君はすぐ立ちあがって、隅の赤電話をかけたが、それは、もうおわかりだと思うが、ドイツ語による電話だった。ずいぶんながながと話していたが私にはさっぱりわからなかった。グートとかドッホとかナインとかが、わかったくらいのもので。

「ぼくがおごりますから、せんばい、どんどんのんで下さい。」

ふたたび席につくと、本間君はこう言った。〈あんた〉かわって〈せんばい〉となっていたのは、学生時代に心境が逆もどりしていたからだろうが、私はてれくさかった。

「けいきがいいんだな。」

「そうだけど、これからけいきがわるくなるんですよ、せんばい。」

このように、妙な言葉づかいを本間君はしたが、これが妙に私の共感をそそった。じっさい、私じしん、いつもそんな感じを抱いて生活しているような気がしたものだ。

それから、まったく、とつぜんであったが、本間君はへんなことを言いだした。といって、これはあとから考えてみて、いかにもとつぜんだったので、あの時はべつだん、とつぜんへんなことを言い出されたとは思わなかった。ごくしぜんに、新刊のおもしろい本が手に入ったといったような調子で、

「ぼくのところに、ドクロが三つもあるんですよ、せんばい。」と本間君は言った。

「ドクロって、しゃれこうべ？」

「そうなんです、見にきて下さいよ、せんばい。」

わけをきいてみて、すぐわかったことだが、本間君は過去一年間ばかり、マクス・ヘヒトという人類学者でドクロを研究しているドイツ人の通訳兼助手みたいなことをしていて、それらのドクロをもらった、というよりも、その人類学者があとにそれらのドクロをのこして本国へ帰ってしまったということだった。おかしな話だと私は思った。

「きみ、もらったのは、それだけ？」

「いや、いや、金もとりましたよ、せんばい、けちな人でしたけ

どね。大金持なんです。」

新聞紙上には出なくても、今の今、世界じゅうを、いろんな人がいったりきたりしているもので、マクス・ヘヒトもその一人だった。大金持と本間君が言った、そのうちわけは、西ドイツのフライブルク近辺に自宅であり観光資源でもある城館を一つ持っているほか、南アメリカ、南アフリカ、オーストラリアなどに銅山やら不動産やら、フェリーなどの権利をもっていることだった。

「金持はけちだもんね。」

「でも、そうとうもらいましたよ、せんぱい。ぼくらのけちとは、けちの度合がちがうんでね。」と本間君は言い、年に三百万円ほどの金をもらったと言ったので、私はびっくりしてしまった。また、十日に五日は本間君も帝国ホテルに住んでいたときき、ますますあきれた。今は昔、十数年前の三百万円だ。

マクス・ヘヒトという男は、本間君の話から逆探知してみるのに、その風貌が、ハリウッド製の反ナチ映画に出てくる、冬は黒テンの毛皮のエリなどついた黒外套など着て、頭が禿げあがって、のっぺりした、くちびるがひどくうすくて、冷酷で利巧な男爵といった男となって、私の中でふくれあがった。これはたぶんビールをのみながら本間君の話をきいているうちにホップの作用でそうなったのだろう。私は旧北京で会ったことのある、「金瓶梅」研究家の中国学者で「性学」の体験的研究家でもあったドイツ人と、このマクス・ヘヒトなる人物がダブって見えてきた。すると、その瞬間、

「西洋人は日本へきて日本婦人に興味をもち、日本にはまた西洋人専門の女もいますがね、ヘヒトさんにはそんな浮気はぜんぜんなかったですね、せんぱい、その点はあんたと似てましたよ。」と本間君が言った。

「そうかね。」と、いささか憮然。

「とにかく、あけてもくれても、ドクロ、ドクロなんですよ、ヘヒトさんは、せんぱい。」

「ドクロなんて、ぼくには興味ないよ。」

「ぼくもですよ、せんぱい。でもヘヒトさんはドクロを三つもおいていったんです。」

「奇特な人とでも言うんだろうね、そういう人は。」

「日本じゅう歩きましたよ、せんぱい。その、ドクロを訪ねてね。」

「世界じゅうだろう、きみ。」

「そうなんです、日本にくる前は、せんぱい、中国に長いこと、おったそうです。」

「ドクロの比較研究をやってるのかね。」

「そればかりじゃないんですよ、せんぱい。ドクロ音楽の研究もやってるんですよ。」

「なに？　ドクロ音楽？」

耳をそばだてざるをえなかった。瞬間、それは木魚を叩くように、いろんなドクロをならべて、いろんな撞木みたいなものでたたいて合奏する音楽のことだろうと考えた。というよりも、そう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com